

反実在論と「真理値リンク」問題

山田貴裕*

1. 導入

本稿は、「真理値リンク」の問題から反実在論を擁護することを目的とする。反実在論は、実在論と対立する世界観である。従って本稿は、世界観の一つを擁護するという営みの一つとして位置付けることが出来る。

真理値リンクとは、時点・時制を跨いだ言明同士のあいだには、真理値の体系的な繋がりがあある、という原理である。例えば、今発話される「教室の誰かはピンク色の髪をしている」という言明と、今から一年後に発話される「一年前、教室の誰かはピンク色の髪をしていた」という言明の真理値は、一致するはずである。反実在論者は、この原理を認められないのではないかと疑われている。それは、反実在論者にとっての「真」が「証拠がある」ということであり、また証拠はいつまでも手元に残るとは限らないからである。たしかに、今発話する言明には、目撃の体験という証拠があるかも知れない。しかしながら、今から一年後に過去時制で言明が発話されたときには、もうその体験は忘れられているかも知れない。そのような場合、こちらの言明は真ではないことになる。ならば、真理値リンクを認められないだろう。しかも、反実在論者にはそれでも真理値リンクを捨て去るわけにはいかない、という事情がある。それは、次節以下で述べるように、真理値リンクは過去時制の言明が持つ内容についての説明になっているからである。言明を検証・肯定するための条件から意味概念を捉える反実在論にとって、真理値リンクはそうした言明を検証するための条件を定式化したものになっているのである。

以下では、まずこの問題の定式化を行い（第2節）、マイケル・ダメット Michael Dummett によって為された反実在論擁護の提案を見る（第3節）。そして、ダメットの説を批判し、発展的な擁護論を展開したクリスピン・ライト Crispin Wright による議論を見る（第4節）。しかし、バーンハート・ワイス Bernhard Weiss はその二人の説について、共に不十分であると述べた。そこで、彼の行った議論を検討し（第5節）、その上で私の見解を提示する。（第6節）。

2. 真理値リンク問題の定式化

本節では、まず真理値リンクの原理を一般的な形で述べ、次いでそれが反実在論者にとって困難をもたらす仕方を述べる。

この原理は、ひとまず以下のように表現することが出来る (cf. Wright, 1985, p.195)。下の (A) から (D) の四つが、真理値リンクの四つのパターンを表している。なお、 S は現在時制文であり、 $Past : S \cdot Fut : S$ はその過去時制・未来時制文。また t_1 は t_2 よりも早い時点とする。

- (A) $(\forall t_2)[Past : S \text{ は } t_2 \text{ で真である} \text{ iff } (\exists t_1)(S \text{ は } t_1 \text{ で真であった})]$
- (B) $(\forall t_1)[Fut : S \text{ は } t_1 \text{ で真である} \text{ iff } (\exists t_2)(S \text{ は } t_2 \text{ で真であろう})]$
- (C) $(\forall t_2)[S \text{ は } t_2 \text{ で真である} \text{ iff } (\forall t_1)(Fut : S \text{ は } t_1 \text{ で真であった})]$
- (D) $(\forall t_1)[S \text{ は } t_1 \text{ で真である} \text{ iff } (\forall t_2)(Past : S \text{ は } t_2 \text{ で真であろう})]$

なおここでは、飽くまでも言明ではなく文の真理値の繋がりを述べるものとして真理値リンクを定式化しておく。

実在論者はこれらの各式を認めることが出来る。その一方で、反実在論者は整合的に認められないのではないかとされる。この相違の根幹には、真理観の相違がある。実在論者は、文は我々の有する証拠や証明（認知能力）とは独立に真や偽に決まっていると考える。しかし、反実在論者は、その文を肯定（否定）するための証拠（反証）がある場合にだけその文は真（偽）である、と考えるのである。（こうした文脈で、証拠があるということを特に「検証可能」と言う。）

反実在論者は真理値リンクを認められないはずだ、と言い立てる議論として、次の三つを挙げることが出来る。一つ目は、証拠は無くなりうるということに立脚した議論である。例えば、仮に今学生を目の前にしているのであれば、「今教室の誰かはピンク色の髪をしている」という文は真であろう。しかし一年後には、「一年前にこの教室にピンク色の髪をした学生がいた」という文のための証拠は手元に無いかも知れないではないか、というわけである。

二つ目の議論は、反実在論者が真理値リンクを認めるためのコストは大きなものになる、というものである。証拠が消え失せてしまうケースに於いてリンクが成立するとしたら、次のテーゼ (T) の「時間的安定性」が失われることになる。

(T) もし文が（現在）真であるならば、その文は（現在）検証可能である。

(T) は、反実在論的な真理の観念を言い表す基本的なテーゼである。反実在論者であれば、この (T) は現在のみならずどの時点でも成立している（「時間について安定的である」）と言いたいだろう。しかし、以下を辿ることで、それが出来ないというこ

とが分かる。証拠が消えてしまうケースでは、次の (1)、(2) が成立している。

- (1) S は t_1 で真である。
- (2) $Past : S$ は t_2 では検証可能でないだろう。

この (1) にリンクの (D) を適用すれば、(3) が帰結する。

- (3) $Past : S$ は t_2 で真であろう。

この場合、(2)、(3) により、反実在論者は次の (4) を認めることが出来ない。

- (4) もし $Past : S$ が t_2 で真であろうならば、 $Past : S$ は t_2 で原理的に検証可能であろう。

だがその一方で、(T) を $Past : S$ について適用した (5) が、 t_2 でも成立すると今 (t_1) 言いたいだろう。それは (6) を認めることである。

- (5) もし $Past : S$ が現在真ならば、 $Past : S$ は現在検証可能である。
- (6) 「もし $Past : S$ が現在真ならば、 $Past : S$ は現在検証可能である」は、 t_2 で真であろう。

すると、これにリンク (B) を適用することで次の (7) にコミットすることになる。

- (7) 「もし $Past : S$ が t_2 で真であろうならば、 $Past : S$ は t_2 で検証可能であろう」は、 t_1 で真である。

これを引用解除すれば、(4) を認めるに至る。これは矛盾である。従って、時間的安定性は成立しないと考えべきである。このコストは、支払うには大きすぎるのではないだろうか。(cf. Wright, 1985, p.196)

三つ目の議論は、真理値リンクが成立するとしたら、それによって実在論的な真理の観念にコミットすることになろう、というものである。真理値リンクが成立している場合、現在 S が真であるだけで、未来に於ける $Past : S$ も真となる。ならば、時間をずらして考えれば次のようになろう。今、 $Past : S$ の真理値を考えるが、その真理値についての証拠は無いものとする。しかし、過去に於いては S が真であるための証拠が存在した。そうであれば、リンクを介して、過去に於いて真であった S のお陰で現在の $Past : S$ も真となるではないか。即ち、文は証拠が無くとも真や偽になりうるのだ。(cf. Dummett, 1969, p.364; p.370)

ここで、反実在論者は真理値リンクを成立しないままに放っておくことも出来ない。それは、反実在論者にとって真理値リンクは、文の「意味」を定式化したものになっ

ているからである。反実在論者は文の意味をその「検証条件」と見做そうとしている。即ち、どのような証拠がその文を真とするか、ということを理解していることが、その文の意味を理解していることだ、と考えるのである。そして、ここで反省してみれば、現在 (t_2) の *Past* : S を真にするような証拠が手元にあるならば、 t_1 に於いて当時 S を真にしていた証拠が存在していたということについての証拠も共にあるのではないだろうか。そのような証拠のあいだの関係を明示的に述べたものが「真理値リンク」なのではないか、というわけである。真理値リンクを全く拒否することは、そうした文のあいだの意味の繋がりを無視することになる。

しかし、このように考えることは、問題の解決にも繋がる。それは、リンクを認めねばならない理由を反省することで、認めるべきリンクを見積もることが可能になるからである。もしかしたら、認めるべきリンクは、提出されているものよりも弱いものであるかも知れないのである。

3. ダメットの議論

ダメットは、反実在論の立場でも真理値リンクを或る意味で成立させることが出来ると論じた。そして、実在論的な真理観にコミットすることにもならない、と。本節では、その彼の議論を見ることにする。なお、ダメットは文ではなく主に言明について述べているが、ここでは文についての議論として提示する。(Dummett, 1969)

彼のアイデアは、真理値を現在の手持ちの証拠によって考える、という路線を徹底するものである。その場合には、真理値リンクが成立する例として次の二つを挙げることが可能になる。一つ目は、現在 (t_1)、 S を真にする証拠があり、しかも「 t_2 に於いて発話される *Past* : S は真である」と今認められるような証拠もある場合。そしてもう一つは、現在 (t_1)、 S を真にする証拠があり、しかも「*Past* : S が発話されたその未来の時点 (t_2) では、その *Past* : S を真にする証拠が手元にあるだろう」と今認められるような証拠もある場合である。具体的には、目の前の学生の有り様に衝撃を受けて、一年後まで忘れることはないだろうと確信するのが第一の場合に当たると言えるだろう。また、常に携帯しており一年後も携帯しているであろう手帳に学生の有り様を書き取るというのが第二の場合に当たる。

この路線で考えるならば、実在論的な真理の観念が導かれることもない。実際、前節の第三の議論の中で挙げられたケースは、いまや矛盾したケースとして扱われるのである。なぜならば、「かつては S のための証拠が存在していた」ということは、「かつて S のための証拠は存在していた、ということについての証拠が、今存在している」ということだからである。もしそうであるならば、今 *Past* : S のための証拠があ

ることになるはずであろう。

彼は、實在論側からの批判を二つ想定し、それに対する反論を用意している。その批判の一つ目は、「 t_2 に於ける $Past : S$ は真である」と今 (t_1) 認めることと、「まさに今 (t_2)、 $Past : S$ は真である」と未来 (t_2) に於いて認めることは別のことではないか、というものである。未来に於ける文の真理値はその未来の時点で手元にあるはずの証拠によって値踏みすることになるのではないか、というわけである。これに対するダメットの回答は、その二つのことは同じことだ、というものである。「未来の時点での証拠」がどのようなものになるかを考えているのは、飽くまでも現在である。我々に出来るのは、現在手元にある証拠によって値踏みすることだけなのである。

二つ目の批判は、たとえ今 (t_1) S のための証拠があろうとも、未来 (t_2) に於いて $Past : S$ のための証拠が無くなってしまうとしたら、やはり真理値リンクは成立しないと言わねばならないのではないか、というものである。これに対し、ダメットは次のように考える。即ち、文を主張することは、その文のための証拠が存在するという一種の存在言明を主張することである。このとき、我々にとってのその量化の変域は、時間と共に変わると考えるべきである。そして異なる時点で主張された文は、量化の変域が異なる以上、異なる意味を有する。 t_1 に於ける S と t_2 に於ける $Past : S$ は別の内容を有しているのである。従って、未来に於いて $Past : S$ のための証拠が無いことになろうとも、それは真理値リンクを逸脱する例にはならないのだ。

4. ライトの議論

ライトは、ダメットのこうした議論は不十分であると批判し、その上で反實在論を擁護しようとした。本節では、そのライトによる議論を見ることにする。(Wright, 1985)

ダメットに従うなら、時間を隔てて為された文の真理値が食い違うということがそもそも無くなってしまう、とライトは指摘する。それは、発話のタイミングが異なれば意味も変化し、別の内容を持つと想定しているが故である。現在発話された「今 (t_1) 教室の誰かはピンク色の髪をしている」という文は真だが、一年後に発話された「一年前、教室の誰かはピンク色の髪をしていた」は証拠がなくて真でない、とする。この場合、ダメットは、これは時間の経過によって文の真理値が変化した例なのではなく、そもそも意味の異なる二つの文だ、と言わねばならないはずだ。彼は、「時間的安定性」の問題は回避したかも知れないが、時間を隔てた見解同士が対立することを説明できなくなっている。即ち、通時的な(不)整合性という観念を放棄してしまっている。これは、高すぎる代償と言うべきだろう。

ライトは、ダメットの提案を二つの「無時間性テーゼ」という概念を使って整理す

る。(ここからは、真理が帰されるものは文ではなく言明であるとして議論を進めることにする。) 一つは、どの時点かで真であるような言明はいつでも真である、という「真理の無時間性テーゼ」である。反實在論とは、一般に真理の無時間性テーゼを拒否する立場だと言える。もう一つは、どの時点かで為される言明は同じ意味で他の時点でも為されうる(或る時点で或る文によって表現された内容は、別の時点でも何らかの文によって表現することが出来る)、という「言明の無時間性テーゼ」である。ダメットはこれをも拒否することで、不合理に陥ってしまった。

ライトが提案する新たな真理値リンクは、真理の無時間性テーゼのみを拒否する反實在論者にとっても認めることが出来るものである。これは、「表現する」と「真である」の二つの述語の時制によって指標付けられているので、「二重指標付けされた真理値リンク」と呼ばれる。

(A*) $(\forall t_2)[Past : S \text{ が } t_2 \text{ で表現していることは真である} \text{ iff } (\exists t_1)(S \text{ が } t_1 \text{ で表現していたことは真である})]$

(B*) $(\forall t_1)[Fut : S \text{ が } t_1 \text{ で表現していることは真である} \text{ iff } (\exists t_2)(S \text{ が } t_2 \text{ で表現するであろうことは真である})]$

(C*) $(\forall t_2)[S \text{ が } t_2 \text{ で表現していることは真である} \text{ iff } (\forall t_1)(Fut : S \text{ が } t_1 \text{ で表現していたことは真である})]$

(D*) $(\forall t_1)[S \text{ が } t_1 \text{ で表現していることは真である} \text{ iff } (\forall t_2)(Past : S \text{ が } t_2 \text{ で表現するであろうことは真である})]$

元の真理値リンクは、「特定の文が過去・現在・未来の時点で真であった・である・であろうということ」に焦点を当てていた。こちらのリンクは、「特定の文が過去・現在・未来の時点で表現する事柄が、今真であるということ」を基本に据えるものである。ここには、真理値の値踏みをする時点は今に限るというダメットのアイディアが受け継がれており、真理述語「真である」が現在形でのみ登場する。

ライトの見るところ、元のリンクは、二つの無時間性テーゼからなる部分の「混合」である。ならば、真理の無時間性テーゼからなる部分だけを上手く除去すればよいはずだ、と彼は考える。実際、(A*) は、次の (a) のような言明の同一性を示すものとして解することが出来る。

(a) $Past : S \text{ が } t_2 \text{ で表現していること} = S \text{ が } t_1 \text{ で表現していたこと}$

これは、言明の無時間性テーゼの一部である⁽¹⁾。

このライトの提案でも、時間的安定性についての懸念をかわすことが出来る。第2節で取り上げた懸念を言い立てる議論は、いまや以下のように改訂される。まず、第2節の(T)は表現し直されて、次の(T*)となる。

(T*) もし文が(現在)表現していることが真であるならば、それは(現在)検証可能である。

そして、(1)は表現し直されて(1*)となる。こちらの(1*)と新たなリンク(D*)から出てくるのは(3*)である。

(1*) S が t_1 で表現していることは真である。

(3*) $Past : S$ が t_2 で表現するであろうことは、真である。

(2)は変更されないが、(2)と(3*)から反実在論者が認めることが出来ないものとして立てられるのは、(4)ではなく、(4*)となる。

(2) $Past : S$ は t_2 では検証可能でないだろう。

(4*) もし $Past : S$ が t_2 で表現するであろうことが真であるならば、 $Past : S$ は t_2 で検証可能であろう。

ここで、上の(T*)を $Past : S$ に適用した場合に得られるのは(5*)である。この(5*)が未来に於いても成立すると想定する場合に認めることになるのは、(6*)である。

(5*) もし $Past : S$ が(現在)表現していることが真であるならば、 $Past : S$ は(現在)検証可能である。

(6*) 「もし $Past : S$ が(現在)表現していることが真であるならば、 $Past : S$ は(現在)検証可能である」が t_2 で表現するであろうことは真である。

これにリンク(B*)を適用することでコミットすることになるのは、(7)ではなく(7*)である。

(7*) 「もし $Past : S$ が t_2 で表現するであろうことが(その時)真であろうならば、 $PastS$ は t_2 で検証可能であろう」が t_1 で表現していることは真である。

第2節の議論では、(7)を引用解除することで(4)を認めるに至り、矛盾となるのであった。しかし、いまやこの(7*)を引用解除して得られる式は次の(8*)である。

(8*) もし $Past : S$ が t_2 で表現するであろうことが(その時)真であろうならば、 $Past : S$ は t_2 で検証可能であろう。

これが (4*) と一致するのは、前件が一致するとき、即ち $Past : S$ が t_2 で表現するであろうことが t_1 でも t_2 でも真である場合である。これは一般には真理の無時間性テーゼを認める場合であるから、矛盾とはならない。

5. ワイスの議論

ワイスは、こうしたライトによる擁護案に批判を加えている。本節ではワイスが指摘したライトの欠陥を見たのち、ワイスの議論が向かう先を確認する。なお、以後はワイスの用語法に倣い、現在時制以外の時制を有していることを「時制付き」と呼ぶことにする。(Weiss, 1996)

ライトの欠陥とは、その新しいリンクから元のリンクが導出できてしまう、ということである。彼は、その導出の前提として次の二つを挙げる。一つ目は、次の二種類三バージョン（計六つ）の引用解除図式である。

(DS1)

S は真である iff S 。

(DS1 – Past)

$Past : S$ は真である iff $Past : S$ 。

(DS1 – Fut)

$Fut : S$ は真である iff $Fut : S$ 。

(DS2)

S が（現在）表現していることは真である iff S 。

(DS2 – Past)

$Past : S$ が（現在）表現していることは真である iff $Past : S$ 。

(DS2 – Fut)

$Fut : S$ が（現在）表現していることは真である iff $Fut : S$ 。

二つ目は、時制付き真理述語についての図式である。元のリンクでは、真理述語は時制付きでも現れていたが、ライトのリンクでは現在時制でのみ現れていた。このことを承け、ワイスは時制付きの真理述語が現在時制のそれとどのような関係にあるかを明示する。ここでは簡単のため、過去時制の真理述語だけを採り上げることにする。即ち、より遅い時点 t_2 に於いて、現在時制文 S はより早い時点 t_1 で真であつたと述べることは、「 S は真である」を t_2 に於いて過去時制で述べることと同じことである、とする。更に、この S を $Past : S$ 、 $Fut : S$ と交換したものを加えてまとめれば、次の

(*)、(* – Past)、(* – Fut) となる。

(*) S は (t_1 で) 真であった = [t_2 で発話される] $Past : (S$ は真である)

(* – Past)

$Past : S$ は (t_1 で) 真であった = [t_2 で発話される] $Past : (Past : S$ は真である)

(* – Fut)

$Fut : S$ は (t_1 で) 真であった = [t_2 で発話される] $Past : (Fut : S$ は真である)

すると、次の (1) から (8) を辿ることで、元のリンク (A) が成立することが分かる。
(なお、現在は t_2 であり、過去時制が関係している時点は t_1 であるものとして考える。) まず、(A) の右辺を (1) とする。

(1) S は (t_1 で) 真であった。

これに (*) を適用すると、次の (2) が得られる。

(2) $Past : (S$ は真である)。

そして (2) に (DS2 – Past) を適用すれば、(3) となる。

(3) $Past : (S$ は真である) が (t_2 で) 表現していることは真である。

この (3) に新しいリンクの (A*) を用いれば (4) が得られる。

(4) 「 S は真である」が (t_1 で) 表現していたことは真である。

ここで (4) 中の 「 S は真である」の箇所に対して (DS1) を適用すれば、(5) となる。⁽²⁾

(5) S が (t_1 で) 表現していたことは真である。

これに対して再び (A*) を用いれば、次の (6) となる。

(6) $Past : S$ が (t_2 で) 表現していることは真である。

更に、(DS2 – Past) を用いることで次の (7) が得られる。

(7) $Past : S$ 。

この (7) に対して (DS1 – Past) を適用すれば (8) となる。これは、(A) の左辺である。

(8) $Past : S$ は (t_2 で) 真である。

ワイスの見るところ、この導出を食い止めるためには、(*) (及び (* – Past)、(* – Fut)) を認めるのを一旦差し控え、時制付き真理述語を別の仕方で説明することが必要である。そこで彼は、文に付された時制付き真理述語の読み方を二つに分ける。それは、「デフレーション的」な読み方と、「実質的」な読み方である。このどちらの用法で時制付き真理述語を扱うかによって、それぞれ認められる真理値リンクが異なることになる。この二つを混同するところに、真理値リンクの困難が生まれる。但し、どちらかが原理的に誤っているわけではなく、文脈によって使い分ければよい、とワイスは見る。

デフレーション的な読み方の場合、時制付き真理述語は、言明の時制を変更する働きを持つものとして扱われる。例えば、この読み方では「一年前、「教室の誰かはピンク色の髪をしている」は真であった」と発話することは「一年前、教室の誰かはピンク色の髪をしていた」と発話することと同じになる。また、現在時制以外の文に付されたならば、その文の時制を言わばキャンセルすることも出来る。そのため、下の各式が成立することになる。

(A') $Past : S$ は真である iff S は真であった。

(B') $Fut : S$ は真である iff S は真であろう。

(C') S は真である iff $Fut : S$ は真であった。

(D') S は真である iff $Past : S$ は真であろう。

これは形式上、元の真理値リンクと同じものである。しかし、ここでは我々の認知能力についてのコミットメントは生じないから、問題が生じることもない。この読み方がデフレーション的と呼ばれるのは、この読み方下での真理述語の使い方が、(現在時制の) 真理の「デフレーション的」説明の下での使い方と同様になるからである。文を名指したり量化したりすることでしか主張できないような、過去や未来についての主張も、この読み方下では可能である (cf. Weiss, 1996, p.593)。

実質的な読み方では、時制付き真理述語は、言明のための証拠が現在以外の時点で使用可能であるということを申し立てるものとして扱われる。例えば、「一年前、「教室の誰かはピンク色の髪をしている」は真であった」と主張することは、「一年前には「教室の誰かはピンク色の髪をしている」という文のための証拠があった、という

ことが今言える」と述べることと同じだ、というわけである。即ち、「S は真であった」とは、過去に於いて S を肯定する証拠があった、ということ肯定する証拠が現在ある、ということになる。また「*Past*: S は真である」とは、現在手元に *Past*: S のための証拠があるということになる。従って、この二つは名目上別のことになる。しかし我々は、それらの一方の証拠が手元にあるとしたら、他方の証拠も手元にあると見做すであろう。それ故に、この二つのあいだには双条件法（リンクの (A')）が成立する。この見做しは単なる想定に過ぎないかも知れないが、我々が過去というものを考えるときに本質的な特徴であるかも知れない、とワイスは見る (cf. Weiss, 1996, p.594)。とは言え、このような双条件法が四つ全て成立するわけでもない。結局、成立するのは (A') 及び (B') の双条件法、そして (C') 及び (D') に於ける右辺から左辺への条件法のみである。この読み方が実質的と呼ばれるのは、現在以外の時点に於ける言明の真理値に言及することになり、真正にメタ言語的となるからである。

6. 論争の調停

本節では、ここまでの議論を承けて真理値リンクの問題を調停することを試みる。私は、反実在論者にとって適切な時制付き真理述語の読み方は実質的なもののみであり、またその読み方の下で成立するリンクだけが認めるべきものであると考える。このことは、真理値リンクの果たしている役割を反省することによって、正当化できる。

ワイス自身は、二つの読み方の内どちらを採用するかは大きな問題ではない、と考えていたが、私はそうは思わない。それは、実質的な読み方こそが反実在論的な真理の観念を反映したものだからである。反実在論者にとって、真とは証拠があるということであり、偽とは反証があるということである。それならば、時制付きの真理述語は、(別の時点での) 証拠の使用可能性を申し立てるものになるのが自然であろう。デフレーション的な読み方は、「真」という語を我々の認知能力から切り離してしまうという意味で、寧ろ実在論的な用法であろう。

たしかにこのとき、四つのリンクが完全に成立するわけではない。しかし、反実在論者が認めるべき真理値リンクは、そのようなもので十分なのではないだろうか。真理値リンクを認める意義について、ライトは、「真理値リンクの役割は、[……] 或る時点で・時制付き文の発話で為される言明を、[その時制と] 発話の時点の関数として同定することである」と述べている (Wright, 1985, p.195)。そしてワイスは、ライトの案出したリンクについて、「このリンクは、まさに異なる時点での発話によって為された言明を同定するために、使われている (そのような仕方では真理値リンクは我々の時制理解に埋め込まれているのだ)」と述べている (Weiss, 1996, p.585)。そして更に、

ワイスが時制付き真理述語を含むリンクを提案したことを踏まえれば、次のように言うことが出来よう。即ち、真理値リンクとは様々な時点での、そして様々な時制による言明の（意味・内容の）関係を明示したものだ、ということである。言わば、真理値リンクは、現在以外の時点・現在以外の時制での言明と、現在の時点・現在時制での言明とを交換するための、一種の翻訳規則の定式化になっているのである。ならば、どのようなリンクが成立するかは、実質的な読み方で真理述語を読み、それぞれの言明の証拠がどのようなものになるかを反省し、どのような（双）条件法が成立するかを考えることによって判定されることになるだろう。これが、反実在論者にとっては実質的な読み方に於けるより弱いリンクで十分だ、と私が考える理由である。

註

* g.yamadatakahiro@gmail.com

(1) cf. Weiss (1996), p.585. この点に関しては、寧ろワイスの方がライトよりも明白に述べている。

(2) なお、このように過去時制の文脈で (DS1) を使用することには、問題があるかに見えるかも知れない。それは、用意しておいた定式化からは一応逸脱しているからである。しかし、ワイスはこれを正当化する議論を行っている (Weiss, 1996, pp.587–8)。ここで使用する図式特に (Past Dis) と呼んで、次のように定式化する。

(Past Dis)

「S は真である」が表現していたことは真である iff S が表現していたことは真である。

これが成立しない場合には、まず、「「S は真である」が表現していたことは真である」と「S が表現していたことは真である」の真理値が食い違うことになる。しかし、それがなぜなのか説明できないだろう、とワイスは考える。そして更に、彼はそうした場合には引用解除図式という一般的な原理の時間的安定性が崩れることになる、という困難を指摘する。(Past Dis) を拒否するということは、次のような (Pres Dis) は過去に於いては成立していなかった、とすることである。

(Pres Dis)

「S は真である」が表現していることは真である iff S が表現していることは真である。

文献

- Dummett, M. (1969). 'The Reality of the Past,' in *Truth and Other Enigmas*: Harvard University Press, 1978, 358-74.
- Weiss, B. (1996). 'Anti-realism, Truth-value Links and Tensed Truth Predicates,' *Mind*, 105, 577-602.
- Wright, C. (1985). 'Anti-realism, Timeless Truth and *Nineteen Eighty-Four*,' in *Realism, Meaning and Truth*: Blackwell, 1993, 176-203.

〔京都大学大学院博士課程・哲学〕